

七五三着くずれ直し処あり
長身の父母にして七五三
簪やリボンや髪置迎える子
階

ぼっくりの歩幅の余る七五三
どの組も爺婆付きの七五三
七五三日和の風を頬に受け
常夜燈袴着の子を待てりけり
千歳飴一寸と持たせて貰ひけり

日溜りに落葉の溜まる坂途中
団栗の野毛坂はまだ続くなり
乳母車舞ひ来る木の葉幌打ちて
野毛坂に団栗落ちて転ぶ距離
団栗落つ得たりや応と舗道受け
硬質の音立て転ぶ椎木の葉

末枯るる駱駝も風に耳を立て
駱駝見る柵につかまり襟巻どき
百獣の王寝てばかり空つ風
動物園団栗狸の檻打ちて

マントヒヒけふは凧聞くばかり
木斛の実の赤らめるこんな頃
十一月ホンドタヌキの空寝入り
十一月こんな日和がよろしくて
木の葉舞ふ空を飛行機上昇中
十一月壁に射す日の白かつし
着始めの冬着のにはふ動物園
指立てて蜻蛉止まらず子の真顔
十月の兔を園児抱っこして

草の実を叩いて幼児につこりと
鴛鴦の胸は豊かに嘴を乗せ
十月の日程の温みハムスター
木枯一号野毛山の空駆けりけり
動物園子らしつかり厚着して
十一月くしゃみ始めと云ふべかり

ちよう鮫が鰐の顔して冬休み
と或る日の机に雲脂と木の葉髪
十月の日の入る後部座席占め
護謨の葉に十一月の日差し乗り
通院はいつまでもみづる櫛見て
新橋の路地裏の木々もみづれり
空風や鎖骨に触る主治医の手
襟ぞくと着たきり雀に冬来たり
花八つ手素寒貧とはなりにけり
谷紅葉冷え厳しきを好みけり
紅葉川息せき切つて岩の間
又喰うてニュースとなりし月夜茸
うれしき事きので云へば舞茸か
冬雀はきはき吾はもこもこと
夜なべの肩凝りゐて蟹の甲羅ほど
文化の日ふうせんとうわた活け込みて
一遍の念仏札めく散黄葉
捨聖片瀬の黄葉舞ふ中を
朝寒空「けふははつきりしませんね」
一塵もなき禅林の鴛鴦の水
伴奏はタンゴがよろし舞ふ黄葉
読み切らん石露の苔の開くまで
文鳥の籠は大きめ文化の日
烏瓜配して備前小物売
颯々と櫛もみづる建長寺
桜並木半分黄葉したりけり
仮もみぢやがて本山本もみぢ
大櫛もみづる上枝うっすらと
芙蓉は実には風の日続く青坊主
江ノ電の昔千鳥の翔ぶ砂丘

さらしくぢらつまむや祖父の象牙箸
地下鉄来る七月の風押して来る

三溪園

本牧に拾ふ桜の落葉かな
落葉踏み本牧桜古並木
三溪園園長賞の菊に佇つ
難しく事考えず菊苗買ふ
虻が来る江戸の隣の肥後菊に
菊花展賞にいろいろあるものよ
懸崖の舟型菊の五六艘
盆菊の新人賞とは如何な方
菊苗買ふ管物いっぽん交え呉れ

冬桜水皺を立て午の池
敗荷に画架おっ立てて日曜画家
風上ミを向いて屯す鴨の貌
園内の小松乍らも手入され
頭を伐られ小春の象の脚めく木
遠くより見て錦木とぼつり云ふ
十月桜夕日当って上つ方
蠅がゐて日のあるうちの花八つ手
鴨の陣上手は池の半日影

酉の市

酉の市不景気風を吹き飛ばし
熊手売れ手締め鮫屋の大將に
高張にほつと灯の入る酉の市
酉の市掏摸に注意と拡声器

上総行

海ほたる
デッキめくベランダ掠め冬かもめ
玄冬の波に唇ささくれて
極月の東京湾に船ごちやごちや
水鳥の行方追ひゐる鼻に風
水鳥のくきやか橋の陰影も

鴨泛かせ銀一条に朝日光ゲ
しるがねの川面に溶けゆく鴨の影
朝の潮離れ水鳥運びけり
海向う海苔の木更津鯊の木更津
降りる飛行機上がる飛行機鯊の海
木更津の刈田の上を機の上昇
飛行機は空航く鱧や冬あをぞら
ささくれるものの始めに冬の波
玄冬の東京湾を船遅々と
もみづれる上総単線引き込みて
豆柿や安房は低山巡らせて
豆柿の疎密上総も奥の邑
来よ来よと月を招きて枯尾花
月招きぽやっぽやっ枯尾花
初煙り八犬伝のゆかりの里
暮れまじと波間に翔ける冬かもめ
単線と柿と刈田を容れて描く
初焼いて煙一本立たす邑
埃浴び街道沿ひに雑な柿
自然薯のいやに素直や栽培物
触感のざらつとしたる零余子買ふ
さみどりのひつじも上総のぺんぺん草
村は川いっぽん挟み柿生り季
鴉柿盗むところを見られをり
館山の波のざんぶり枯尾花
上総も山奥の部落の柿低木
淡々と安房の低山もみづれる
日蓮生地柿も万灯掲げけり
上総山中五つ色ほどの畑の菊

養老溪谷

川沿ひに歩いてしこたま紅葉冷え
岩抱いてもみづる楓養老谿
水滲む岩てらてらと紅葉谷
岩滑り下流へ下流へ紅葉川
蔓被き雑木に還る山の柿
川の上に張り出す紅葉の葉先かな
さうさうと小滝を落とす落葉谷

滝水の勢ひをかわす岩の形（なり）
岩棚に落葉止どまり吹かれ飛び
鶴鴿の小走り紅葉且つ散るに
唐錦回廊なせり紅葉川
階の落葉見て只登るのみ

伊勢山皇太神宮

七五三気ばってあげのお賽銭
鳩も目を丸くしてみぬ袴着を
逃ぐる鳩猶追ひ翔たせ袴着は
人に馴る鳩の寄りくる七五三

属目

カシミアセーターないづくしで来た妻に
十一月あたたかき日を端折りけり
身の締まる冬が始まりゐたるはや
冬立つと口を揃えて町雀
空しかる色を泛かべて野路の菊
鼻唄にも演歌の季節冬始まる
風荒ぶその夜の演歌冬ひしひし
林檎の荷解かんと鼻唄交りかな
阿字ヶ池鴨の季節となりにけり
ファックスの吐き出す紙の徐々に冬
ぶるぶるとファックス始動冬籠
水栽培さふらの芽の伸びて冬
押し詰まる憶ひの中の冬さんご
石路の花閑又閑の日を送る
玻璃を透く冬日の中にあるたゆさ
へんぽんと箱根の空のわた芒
一息つく眼に冬雲の移る見ゆ
町内に湯屋が健在冬の月
それとなく言へど通ぜず猛り鴟
木工の手すさびに
気に入りし手造り鉛筆枯木製
建て増しの続く町内石路の花
焼諸屋まだまだ遠くやきもきす
淡々と日送り日迎え冬の雲

毛布など一枚足して寝る夜かな
虫喰はぬ裡のくわりんを採らずんば
勢ふもの身ぬちに満ちて冬立つ日
蟹漁の裏日本に冬立てり
けふ以て蟹漁開襟日本海
お昼のニュース越前に蟹あがるとよ
せいこ蟹蟹井にして唐錦
蟹漁に向うエンジン音高らか
南天の出荷作業や鏡ぞら
冬立てる日や小寒さの文字通り
質屋の路地小走りに冬が来て
採れといふくわりんの下に佇める
箸止めくわりん採り頃かとおもふ
くわりん漬け冷え症直せ五十路妻
冷え症の妻がくわりんを漬けるべく
日を浴みてくわりん採られし木の彳てり
鈍りては海鼠のごとく日向ぼこ
日向ぼこ一流木のごと座して
散歩途上出合ひし犬も冬着着て
当節の流行りや犬も冬着着て
二三日産土落葉掃かれずに
木の葉髪目つむり着きぬ品川に
停年も間近と見ゆる木の葉髪
似かよいし柄のマフラー通学路
空風にガサツな歩き方通す
木の葉髪何かメモとる風の中
落葉騒風にも似たり小雨にも

番外

白加賀の老来ますます至妙の芸

はやばやと冷え込み千両美しき年
残菊のうすむらさきにうなだれて
氷点下真冬日玻璃の塵が見え
自然薯はすすきの褥して届く
自然薯着く友の旦那の骨折りもの
自然薯を掘るに一ト聲掛くことも
自然薯の包み方からして律義
自然薯の荷主を紐を解き乍ら
太鼓判押す自然薯を横目に見て
林檎の荷着きしが当面玄関に
図体より推して林檎の荷とわかる

とろろ汁仙人食の一つにて

十二月前兆述べて目の話

活けものはふうせん唐綿書道展

ごはん時卓いっばいに冬灯し

バスツアー代の裡なるポピー摘む

蕾の裡想像してはポピー摘む

姿勢よきポピーばかりが摘まれをり

厚着してもとより装(なり)に無頓着

齡取ったかな蓮根はやや苦手

林檎噛み砕く力の疾うになし

蓮根の酔のもの脳天打ちにけり

酔蓮根骨のごときを箸にせり

蓮根の穴見て雪舟断脾図ふと

冬鳥に足を止めぬる一老人

翌の事頭にちらと酔蓮根

十二月一日関にかかると

お隣りと同じ植木屋松手入れ

寄せ鍋をつつき合ふ友現役よ

鱈大根友はまだまだ働くと

冬至湯に浸かりて肩こりだいぶ楽

濁り酒銘も凛々しく「美少年」

メールにて林檎送付のこと手短か

濁り酒壇振る力まだまだよ

濁り酒掻き混ず六十路の馬鹿力

濁り酒効きて暖房止めにゆく

濁り酒ひとりで酔へることに慣れ
菊苗の様子見にゆくちゃんちゃんこ

菊苗の面倒みたかと妻のこゑ
菊苗を庭一番の日向に置き

鈍感な鴨なりあはてて追い掛けぬ
一人酒ひやと酔牡蠣の喉ざはり

吸はる牡蠣舌同類と思ひけり
湯豆腐に酔の効用を知る齢ひ

ストックの香もて玄関浄めけり
夕月の白増す菊の終りかな

とろ味佳き濁り酒には酔牡蠣かな
削ぎ落つる銀杏精彩欠きにけり

花八つ手俄曇りとなりにけり
枯木瘤産土の空突き上げて

鴨の陣崩してしまふさあ知らぬ
おこうこと酒あれば佳し桂郎忌

レモン添え外食めきぬ牡蠣フライ
火桶せし家の間取りの思はる夜

河豚鍋にあやかる程のさそい無し
火消壺記憶の底の常闇に

少年時代

火鉢に火起こす役目をてきばきと
小説の中の火燵に虚子と子規

長身の体軀に伍してスケーター
湯豆腐の上の電球揺れて地震

岩牡蠣を呑み込むときの虚ろな眼
牡蠣啣へこれから喉の滑り台

喉攻めにかかる酔牡蠣の酔の強し
箸つける酔牡蠣の裡にルドンの目

紅葉狩当地お天気おほむね晴れ
干蒲団取り込めといふ例のこゑ

柿硬軟食べ分け家に籠もりがち
水滴のぶっくり皮張り陸奥林檎

海鼠噛むその眼返事を保留して
つうかあの仲の妻出す旬海鼠

バレリーナ並みの毛根水栽培
じゃがいもを煮るごと初冬の日暮れ雨